



いま、百年分の思いを込めて、
一杯のすいとんが伝えてくれること。

郷土の愛に

先人の涙と愛がしみこんだ、この福智の大地で
百年の思いを込めて故郷を伝える一杯のすいとん。
子どもたちが胸を張って誇れるまちへ…



「福智名物・方城すいとん」のメニュー化に、家族が一つになって協力した井本さん親子。

今回、ご当地グルメの新メニュー開発にアドバイスで協力したのは、妻・雅美さんと長男の莉玖斗くん。生まれたばかりの葉愛ちゃんは、その笑顔で力強い支えになりました。かつて、看護師の夢をかかえるため、高校卒業後からこの町を後にした妻・雅美さん。単身大阪で、学校と病院を合わせて7年間。見知らぬ土地と命に向き合う現場はとにかく

故郷の大切さをこの町で伝えたい

「ふるさとの人に喜んで欲しい。少しでも生まれ育った町の役に立ちたい。福智で生きていくことを決めた日、店名にその気持ちを込めました。」11月から新メニューに「福智名物・方城すいとん」を掲げた「天ぷら割烹 福善」。店主の井本善尊さんは、自分の名前と故郷の町名から一文字ずつ取って、2年前、不転転の決意で店を構えました。

く大変な日々だったそうです。そんな、つかの間の休みに帰省する雅美さんを癒やしたのが故郷でした。「子どもたちにも故郷の大切さを知って育って欲しい。この町でたくさん友人と思い出を作って、笑って過ごして欲しいですね」と優しいまなざしを注ぎました。

絆つないだ一杯が物語る百年

「子どもたちが笑って過ごすと、そんな当たり前の日常が、一瞬で奪われた非情。それが百年前に起きた「方城大非常」です。多くの孤児がこの町にあふれ、幼な子の心よりどころと絆は、無残にも引き裂かれました。わが国の発展の礎を築き、多くの犠牲をはらんだこのまちの炭鉱。隆盛は誇らしげに伝えられますが、暗く悲しい過去は、長年伏せられていく傾向にありました。最近では子どもたちや、親

までもが、実際ここに炭鉱の煙が上がっていたことを日常で感じることはありません。かつて天高くそびえたボタ山の存在も、ボタ山の言葉の意味さえも風化しつつあります。



ふるさとに伝えたいのは、かつてヤマの路地がはぐくんだ愛と絆でした

炭鉱の風景はすっかり変わり果て、かろうじて昔の面影をしのげるのは、方城炭鉱の赤レンガ記念館のみとなりました。しかし、あの日から百年を迎え、「方城すいとん」という一杯が、ヤマの小さな記憶と、故郷が培った絆の意味を伝える役目を担おうとしています。

郷土の誇りを全ての子ども達へ

12月15日に全校の机に並ぶ「福智名物・方城すいとん」。その日、2024年の子どもたちが「方城大非常」をテーマに、故郷への学びを深めます。

同じ時間に福智の命の教材で思いを深め、同じ故郷の味をかみしめ、全生徒児童が哀悼の意を込めて黙とうをささげる…。この記憶はきつと、小さな胸の奥に残るはず。 「私たちの町には何も無い」と、郷土に誇りが持てない人が増え、子どもたちにも影響を与えているといわれる現代。



「方城大非常」という事実をはじめ、さらに深い故郷の姿を子どもたちに気づき、感じて欲しい」と、教材準備に取りかかる伊方小の児童と永津明敏先生。

ふるさとを見つめ直し、先人を敬い、郷土愛を深めることが、やがて自尊心につながり、子どもたちが成長した時、かつての「燃える町・福智」が故郷なのだ、胸を張って言えるのではないだろうか。

炭鉱の路地が育んだ、垣根のない郷土愛。ひたむきな情熱。子どもたちに注がれた温かなまなざし…。現代社会で忘れ去られようとしている古くさいこのキーワードこそ、何より求められているのかもしれない。

先人たちの汗や涙、喜びと苦しみ、愛と希望がしみこんだこの故郷「福智」の大地で、いま、私たちは生きています。